HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山本多助氏のノートに含まれるアイヌ語樺太方言語彙
Author(s)	田村, 将人
Description	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
Relation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed.
Citation	サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書, 145-155
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38307
Type	conference paper
File Information	14tamura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サハリンの言語世界（津曲敏郎編，北海道大学大学院文学研究科，2009: 145–155）

山本多助氏のノートに含まれるアイヌ語樺太方言語彙

田 村　将 人
（北海道開拓記念館）

１．はじめに

北海道東部の釧路地方で著述家などとして活躍した山本多助氏（1904～1993）のノートや蔵書などが、市立釧路図書館に収められている。その詳細や、彼の経歴や著作一覧は既に触れられているので〔松本 2005:167-201, 205〕、ここでは、本編で紹介するアイヌ語樺太方言に関する記録、さらに彼が樺太を訪れたころの樺太アイヌ村落についてのみ紹介しておきたい。

本編で紹介する資料は、ノートのうち 30 番と整理番号が付された大学ノートで、おもて表紙に「8 号／アイヌの伝説／山本多助」と、うら表紙には「北海道アイヌ歌及伝説／樺太伝説及び物語／㊊清書しべき」と書かれている。山本氏は 1936 年 10 月～37 年 2 月まで当時の樺太に滞在し、樺太アイヌの人たちとの交流を持ったとされる。その際に得られた情報がノートの後ろから、また前からは主に釧路地方のアイヌ語が記されている。このノートは、おそらくその場で記されたものではなく、後に整理されたものではないかと思われる点があるが明らかにしえていない。大学ノートには縦書きで、基本的には万年筆（少なくともインク）で書かれており、ほぼ 1 ページを単位として内容はまとまっている（箇条書きではない）。そのうち数か所には「1960 年 3 月山路送り」などと赤鉛筆や青鉛筆などで記入されている。これらは、早稲田大学図書館の山路廣明氏が編集していた同人誌『アイヌ・モシリ』に掲載された、山本氏の文章と一致する。山本氏の遺稿をすべて確認したわけではないが、『アイヌ・モシリ』ほか山本氏の著作に紹介されていないと思われる個所を本編では紹介する。

ノートの内容は、東海岸の新問と白浜で採録された語彙や説話が中心で、文化事象に関わるメモはほとんどない（他のノートに書かれている可能性もある）。また、山本氏が釧路の首長の系統であるためか、樺太アイヌの首長の系譜に関する聞き書きには多くのページが割かれている。さらに、北海道アイヌにはない冬季の半地下式住居での生活体験が、説話に登場する tonci との関わりで記録されている。本編では、主として語彙と、清朝と関わりのあった首長に関する歴史的な記録を紹介する。さて、情報提供者であるが、首長の系統に属する人たちの名前はあるが、新問では主に誰から聞いた情報かを確認することはできない。一方で、白浜では木村ウサルシマ、白川仁太郎両氏からの情報が主ではないかと思われる。なかでも木村氏とはその後も文通し、彼女からの手紙が前述の『アイヌ・モシリ』に掲載されている。木村、白川両氏は後に山本祐弘、知里真志保氏たちの研究にも協力している。とくに、知里氏の各種辞典で語彙採録地「シラウラ」とある語は両氏の情報である可能性が高い。

山本氏が、日本の植民地だった樺太（南サハリン）を訪れた 1936～37 年、すでに樺太庁によって樺太アイヌは数か所に集住させられていた。ここで簡単ではあるが、1930 年代の樺太アイヌ村落とその造成年を確認しておく。言語学および民族学的データを扱う上でも

重要なことである。東海岸には北から、多来加（未集住）、新問（1919 年集住、以下同じ）、樫保（1915 年ころ。さらに 1931 年ころ新問に再集住）、白浜（1921 年）、落帆（1912～13 年）。西海岸には北から鵜城、来知志（いずれも未集住）、小茂白（1912 年ころ）、智来、登富津、衆子舞、多蘭泊（いずれも 1907～08 年ころ。うち衆子舞の住民は 1918 年多蘭泊に再集住）〔田村 2007〕などの村落があった。このほか、樺太アイヌ以外のサハリン先住民（ウイルタやニヴフ）は 1926～27 年ころオタスに集住させられている。このうち、山本氏が訪れた新問や白浜に関して言えば、周辺の数か村が統合されたが、言語的、社会的な親近感がどの程度考慮されたのかはまだよくわかっていない。いずれも当時村のないところに造成された人工的な村落であった。

さて、ノートに記録されたアイヌ語について一言しておきたい。山本氏は、釧路や阿寒を含む道東地方のアイヌ語母語話者だったと考えられ、さらにノートに残された日本語の文章からは日本語東北方言の影響をかいま見ることができる。このような背景をふまえ、アイヌ語樺太方言の語彙が記録されたと考えなければならないが、編者には詳細な検討を行なうことはできない。しかし、言語研究のみならず、文化、歴史研究においても非常に興味深い情報がこのノートには含まれているため、編者の注釈が中途半端なものであることを承知の上で、あえて紹介することにした。あらかじめご了解いただきたい。

最後に、資料の利用に関して市立釧路図書館にはお世話になりました。また、満州語について津曲敏郎先生のご教示に深く感謝いたします。さらに、遺稿を寄贈されたご遺族のご理解ならびに釧路アイヌ文化懇話会の皆さんの整理作業に敬意を表します。

凡例

・編者による注記は〔　〕内に記した。
・〔ママ〕と記したのは「原資料のまま」の意味である。
・漢字について旧字は新字に改めたが、仮名遣いや誤字は資料性を考えてそのまま表した。
・原資料は縦書きである。
・原資料のノートの罫線とは無関係に、翻刻する上で便宜的に行番号を左端に付した。なお、注釈の番号はこれと対応している。
・原文が数行空いている場合は、行番号を付さずに 1 行空けた。
・〔黒鉛筆〕などの注記は、とくにことわらない限りその行全体が黒鉛筆で書かれていることを示している。
・注釈では、各種辞典より該当する語を抜き出し、原音を想定する際の参考とした。なお、服部四郎編『アイヌ語方言辞典』の樺太方言の表記法を参考としたが、便宜的なものであることをことわっておく。

２．山本多助ノート№30

２．１．色の名称（後ろから 5 ページ目）

1: 樺太アイヌ　物の色

2: 白色　　レタラ
3: 青色　　シウニン
4: 黄色　　シケレベカ
5: 黒色　　クンネ
6: 茶色　　クラシノ
7: コイ茶　　クラシノ　ポウス
8: 赤茶　　フウレ
9: アサギ　　マウッカン　ポウス

≪注釈≫
2:tetara【方言辞典】。 3:siwnin「緑、青い、水色」【方言辞典】。 4:sikeripe「黄色い」【植物篇】と、kaa「糸；縫い糸」【方言辞典】か。 5:kunne「黒い」【方言辞典】。 6:kurasno「黒い」【方言辞典】。 7:po'us「綿布、布」【方言辞典】。 8:huure「赤い」【方言辞典】。 9:？

２．２．手の各部名称（後ろから 8 ページ目、図 1 参照）

1: ハツコンプ〔小指〕
2: ハツコンンピ、イウピ〔薬指〕
3: ノシケタモンベ〔中指〕
4: 手　バラキタ〔手のひら〕
5: 手首、テバックッ〔手首〕
6: イケンベ〔人差し指〕
7: ポロモンベ〔親指〕

8: 白浜で聞
9: 樺太手の名

≪注釈≫
1: hacikomompeh【人間篇】、hahkomonpeh【方言辞典】。 2:「ンン」はママ。hahkomonpeh nannaha【方言辞典】とあり、来知志では nanna は姉を指す。これにより「イウピ」は、yupi「兄≪カラフトの雅語≫」あるいは yupo「兄」【人間篇】であるか。 3:noskeke、noskike【方言辞典】、「タ」は ta「〜に、〜で」か。 4:parakita「手の甲 ； 手背」【人間篇】、parakita「手（手首から先)」【方言辞典】。 5:tekahkuci「てくび ； 腕関節部」あるいは tehkuci 「てくび ； 腕関節部」【人間篇】。 6:ikemmompeh【人間篇】。 7:poromompeh【人間篇】。

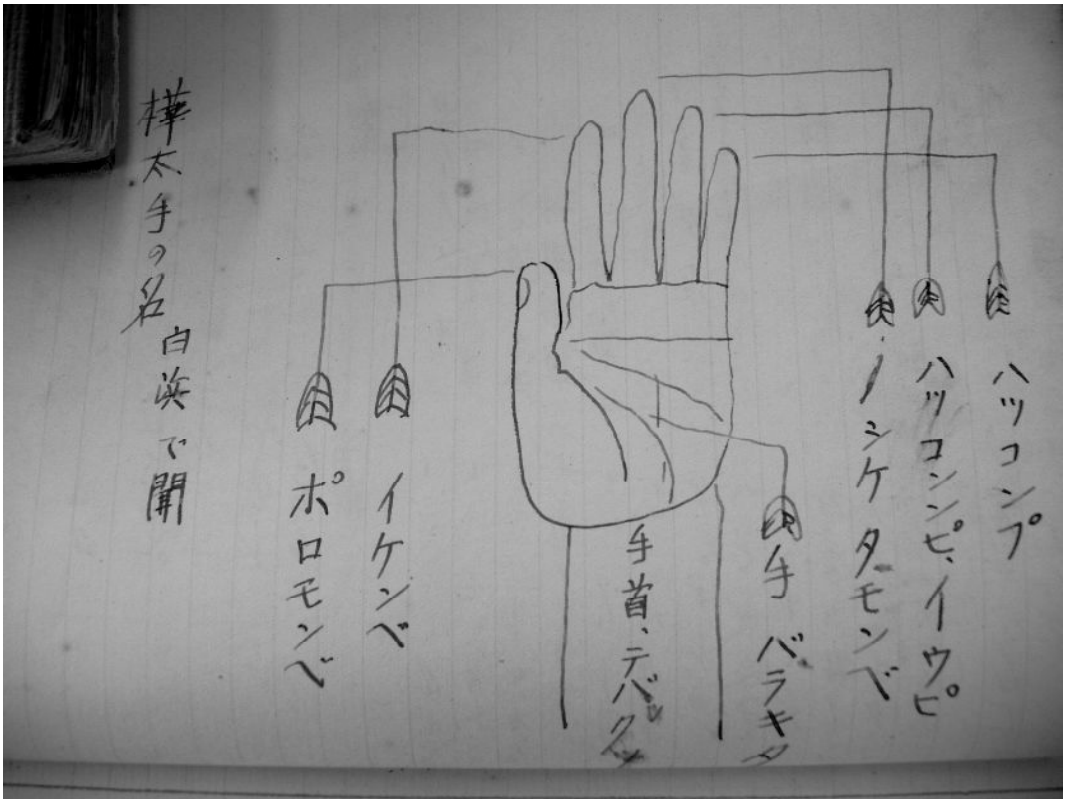

図１　手の各部名称

２．３．1937 年 1 月新問で採録された語彙（後ろから 9 ページ目）

1: 樺太アイヌ言葉
〔上段〕

2: 樺太言	日本言
3: ヘンケ	老人
4: アッチ	老母〔ママ〕
5: アバア	父
6: ナアナ	母
7: ユビ〔青鉛筆〕　同	兄
8: ノカンラム	弟
9: シクッマッネクル	若い女
10: ヤイコブンテ	ヨロコプ
11: ウンズ	火
12: ワツカ	水
13: ケタ	星
14: ナイ	河
15: イソカムイ	熊

16: シマレイ　狐
17: エトッカ　烏
18: イランカラップテ　今日ハ
19: ウタサ　遊ビ
20: オハランコロ　恋しる〔ママ〕
21: イノコシキ　りんき

22: シウカウカウ　ハリ仕事

〔下段〕
23: チュッチェプ　鮭
24: エモヘ　鱒
25: ソッカナ　カジカ
26: アラカヘ　キウリ
27: カバレイ　カレイ
28: サアス　昆布
29: タカッカ　蟹
30: カンカイ　コマイ
31: ホマ　スヾコ
32: ムンサンケ　ホウキ
〔数行空けて〕
33: キナチシカ　テンテン虫
34: ハンカプイチヨッチャ　トンポ
35: ウンズラッカ　チヨチヨ
36: エフンコナ　ハエ
37: ウネ　カ
38: ラッス　シラミ
39: オヤウ　ヘビ
40: オプンパケ　カヘル
41: オシケ　ウサギ

42: 昭和十二年
43: 壱月新問

≪注釈≫
2: ノートに線を引き上下 2 段で記されている　3:henke【方言辞典】【人間篇】。　4:ahci【方言辞典】【人間篇】。　5:apa【人間篇】（鵜城は aaca）。　6:nanna【人間篇】（鵜城、多来加は ommo）。　7:「同」とインクペンで記されているが、青鉛筆で「ユビ」と書き加えられ

ている。yupi「カラフトの雅語」【人間篇】（白主、白浦、新問は yupo）。　8:nokanramu【人間篇】。　9:sukuhmahnekuru【人間篇】（白浦、相浜、内淵で「年頃の娘」の意）。10:yaykopunteh か？（来知志では yaykonupuru など【方言辞典】）。　11:unci【方言辞典】。12:wahka【方言辞典】。　13:keta【方言辞典】。　14:nay【方言辞典】。　15:isokamuy（一般に、樺太では iso「クマ」だが、クマ神の頭痛 iso-kamuy sapa-araka【人間篇】などの用法もある）。　16:sumari【動物篇】。　17:etuhka「ハシブトガラス」【動物篇】。　18:irankarapte（来知志では irankarahte【方言辞典】）。　19:utasa（訪問す、訪う【あいぬ物語】）。20:oha-ram-kor「空の・心・を持つ」ほどの意味か？。　21:inokoski（北海道の美幌で nokoski りんきする【人間篇】）。　22:suukawka?（参考：ukawka「縫う」、suuka'ukakaa「縫い糸」【方言辞典】）。　23:cuhcep（cuhceh【動物篇】）。　24:hemoy?（樺太では hemoy のほうが多いが、道東では emoy「カラフトマス」【動物篇】の形式がある。また、原手帳（未確認）が横書きで右から左に記録されていたことによる誤記という可能性も捨て切れない）。25:sohkana【動物篇】。　26:arakoy【動物篇】。　27:kapariw【動物篇】。　28:sas【植物篇】。29:takahka【方言辞典】（「タラバガニ」【動物篇】）。　30:kankay【動物篇】。　31:homa（「魚卵一般」あるいは多蘭泊では「筋子」の意【動物篇】）。　32:munsankeh【方言辞典】。　33:？。34:hankapuycohca【方言辞典】、多来加では hankapuycotcakikir【動物篇】。　35:uncirakka（「Unchi-raka, ウンチラカ, 蝶, 蝿, 蛾」【バチラー】）。　36:（参考：多来加で ehunkor「ヌカカ」ehumkor「ブユ」、また白浦で ehumkoro「ブユ」【動物篇】とある）　37:uneh（多来加で unep「カ」、新問、白浦ほかで uneh「ブユ」【動物篇】とある）。　38:rasi【動物篇】。39:oyaw【動物篇】。　40:opunpaki【方言辞典】、opompaki あるいは opompoki【動物篇】。41:osukeh あるいは osukep【動物篇】。　42:29 行目「タカッカ　蟹」の下に縦書き。　43:30 行目「カンカイ　コマイ」の下に縦書き。

２．４．1937 年 2 月白浜で採録された語彙（後ろから 11 ページ目）

1: 昭和十二年二月　樺太白浜
〔上段〕

2: アイヌ言	日本言
3: ウサント゜シイアイヌ	新夫婦
4: ウムレッアイヌ	夫婦
5: イケレ、ホコ	色男
6: イケレ、マチ	情婦
7: ラン	ムネ
8: ト	チツ
9: ホン	ハラ
10: ハンカプイ	ヘソ
11: オシコイ	尻
12: クイサバ	スザ頭

13: ウトニ	スネ
14: ウラアックツ	足首
15: ケマ	足
16: アクッポニ	カンセツ
17: バルレ	足の上
18: ケレポ	足下
19: ヌマ	毛
20: ランカ、ヌマ	ムネ毛
21: ヤアト゜、ヌマ	ワキ毛
22: ウトニン、ヌマ	スネ毛
23: サバ、ヌマ	頭毛
24: シシラ、ヌマ	マツ毛
25: ララ、ヌマ	マユ毛

〔下段〕

26: アイヌ言	日本言
27: サバ	頭
28: レクツ	首
29: キントン	シタヱ
30: ノタンカム	ホホ
31: ノタンサム	ホホヨコ
32: ピセコロ	ニンシン
33: ポーヌ	出産
34: ウタサ	遊
35: イコアス	舞
36: ライヘマカ	死亡
37: ウタラスス	送式〔ママ〕
38: アット　ラン	雨フリ
39: ヌチヤー	露亜矢人〔ママ〕
40: チルムン	便所
41: ホイヌ	テン
42: オシユケ	ウサギ
43: コッセアチヤボ	キネジミ

≪注釈≫

2:ノートに線を引き上下 2 段で記されている。 3:usam「結婚する」【方言辞典】、tusi?「？」、aynu「人間」。 4:umuureh「結婚する」【方言辞典】、aynu「人間」。また umurekaynu「夫婦」【人間篇】。 5:ikere?（参考：「Ikera, イケラ, 恋人」【バチラー】）、hoko「（の）夫」【人間篇】。 6:ikere?、maci「の妻」【人間篇】。 7:ram「胸」【人間篇】。 8:too「乳房」【人間篇】。 9:hon【人間篇】。 10:hankapuy「へその穴」【人間篇】【方言辞典】、なお、美幌と屈斜路では「へそ」の意【人間篇】。 11:uskuy【人間篇】【方言辞典】。 12:kuysapa「ひざ」【人間篇】【方言辞典】。 13:多蘭泊では utonin、多来加では utunin【人間篇】。14:ureahkuci【人間篇】。 15:kema【人間篇】【方言辞典】。 16:akuhponi「足首、足関節部」【人間篇】、「くるぶし」【方言辞典】。 17:para-ure「足の甲」【人間篇】。 18:kerepohpe「足裏」【人間篇】か。 19:numa【人間篇】【方言辞典】。 20:rankanuma【人間篇】。21:yatunuma【人間篇】。 22:utonin(utunin)numa。 23:sapanuma【人間篇】【方言辞典】。24:sisrah「まつ毛」【人間篇】【方言辞典】、sisrahnuma の形式があるか不明。 25:rara「眉」【人間篇】、樺太に raranuma の形式があるか不明（参考：rar(a)numa【萱野】【バチラー】）。27:sapa【人間篇】【方言辞典】。 28:rekuh、rekuci【人間篇】【方言辞典】。 29:kihton「額」【人間篇】あるいは kistom【方言辞典】。 30:notankam【方言辞典】、notankan「頬肉」【人間篇】。 31:notan「頬」sam「のそば」の意か？。 32:pise「妊娠」【人間篇】、koro「を持つ」の意か？。 33:poonu【人間篇】。 34:utasa「訪問す、訪う」【あいぬ物語】。 35:ikoas【方言辞典】。 36:ray「死ぬ」【人間篇】【方言辞典】、hemaka「～し終わる」。 37:utara「人びと」、？ 38:ahto ran「雨が降る」【方言辞典】。 39:nuca「ロシア人」【人間篇】【方言辞典】。 40:cirumun あるいは cirumunka【人間篇】。 41:hoynu「エゾテン」【動物篇】。42:osukeh あるいは osukep【動物篇】。 43:rohse「リス」【方言辞典】【動物篇】、acapo「おじ」【方言辞典】。

２．５．清朝と関わりのあった首長たち（後ろから 19 ページ目、図 2 参照）

1: 樺太三酋長萬洲旅行

2: 東海岸にアイコタンとて大部落有
3: 古戦場にて　アイヌ間に有名な所なり
4: アイ古潭未孫〔ママ〕乙名シレクアイヌの弟バフンケ大酋長なり〔黒鉛筆〕
5: パフンカアイヌ〔黒鉛筆〕
6:〔「パフンカアイヌ」から線を延ばして〕父　ヌアシライヌ　新問生れ〔黒鉛筆〕
7: 母　シッラトカン　相浜生れ〔黒鉛筆〕
8: アイコタン　酋長　ニシカラン
9: シララカコタン　酋長　ノテカラマ
10: ナヨロコタン　酋長　シテクレラン

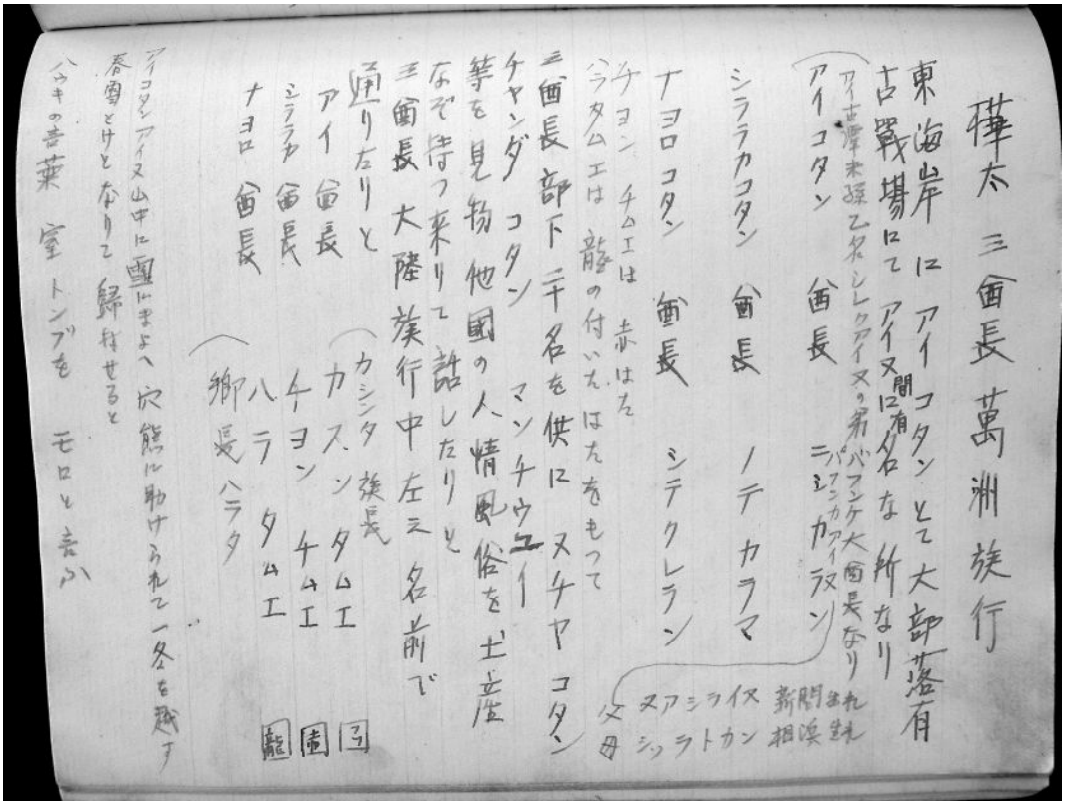

図２　樺太三酋長萬洲旅行

11: チヨン　チムエは　赤はた〔黒鉛筆〕
12: ハラタムエは　龍の付いたはたをもつて〔黒鉛筆〕
13: 三酋長部下二十名を供にヌチヤ　コタン
14: チャンダ　コタン　　マンチウユー
15: 等を見物他国の人情風俗を土産
16: なぞ持つ来りて話したりと
17: 三酋長大陸旅行中左之名前で
18: 通りたりと
19: 　　カシンタ　族長〔黒鉛筆〕
20: アイ酋長　　カスン　タムエ　フツ
21: シララカ酋長　　チヨン　チムエ　赤
22: ナヨロ酋長　　ハラ　タムエ　龍
23: 　　郷長　ハラタ〔黒鉛筆〕

24: アイコタンアイヌ山中に雪にまよへ穴熊に助けられて一冬を越す〔黒鉛筆〕
25: 春雪とけとなりて帰村せると〔黒鉛筆〕

26: ハウキの言葉　室　トンブを　モロと言ふ〔黒鉛筆〕

≪注釈≫

1:「酋長」「萬洲」ともにママ。　2:アイは東海岸の村名で、日本領時代の相浜。kotan「村」【方言辞典】。　4:「バフンケ」は日本名を木村愛吉といい、1919 年末に亡くなるまで非常に大きな影響力を持っていた首長〔田村 2007〕。　5:「バフンケ」と同一人物だと思われる。　6 および 7:「ニシカラン」（8 行目）との関係は不明。　8:「ニシカラン」は、間宮林蔵が文化 5〜6（1808〜1809）年に得た「カーシンタ」に関する情報のうち、東海岸の「ショユンコタンのニシカニ」と関係があるか〔間宮 1988:104〕。　9:シララカとあるが、おそらく東海岸の村名シララオロで、日本領時代の東白浦だろう。なお、「ノテカラマ」は、松浦武四郎が弘化 3（1846）年に会ったノテカリマと同一人物だろう。当時和人の番人よりも東海岸のアイヌに影響力を持っていたという〔松浦 1999:433-434〕。　10:ナヨロは西海岸の村名で、日本領時代の名寄。「シテクレラン」は、松浦武四郎によると 1846 年当時 51 歳のシトクレラン〔松浦 1999:449〕で、いわゆるヤエンコロアイヌ文書を持っていた首長の家系である。　11:清朝と交渉のあった首長やその系統について調べた小川運平は、1909 年の聞き取りから「シララカはチウジヨ、ウシヨロもチウジヨ（此チウヂヨは何官なるや今に考へられず）」と記している〔小川 1923:151〕。満州語に juwan booi da「十戸の長」、juwan i da「護軍の長」というような官職に関係した表現があり、juwanci「十番目」という語である可能性はあるが不明。また、「ムエ」は、満州語の meyen「兵士の一隊、一団」、あるいは meye「妹の夫、妻の妹の夫」である可能性もあるが不明である。なお、満州語は津曲敏郎先生のご教示による。以下、同じ。　12:満州語で hala「一族、姓」da「長」。　13:nuca-kotan「ロシア人の村」。　14:canta-kotan。広く santa「山丹人」【人間篇】と表記されるが、canta とも〔多田 1999〕。manciw「満洲人」【人間篇】。　19:満州語 gašan「村」da「長」。　20:「カスン　タ」は 19 行目を、「ムエ」は 11 行目を参照。なお、□で囲まれた文字は「フツ」と読めるが意味は不明。21、22 行目も同様に□で囲まれている文字がある。　21:近藤守重「辺要分界図考巻之三」（1807 年）には、「山丹人蝦夷人ト交易ノ品」の中に「赤地錦チヨンチヨ」とある〔近藤 1905:34〕。さらに、安政 3(1856)年松浦武四郎は、シララヲロのウイキシユ（ノテカリマの孫）が「赤地牡丹なる純（緞）子の広袖」を着ていた〔松浦 1978:624〕と記しており、「赤はた」（11 行目）とともに、赤色が共通しており興味深い。　22:ナヨロにのみハラタがいることは前述の間宮、小川の記述にも共通する。　24:これ以降は首長とは関係のない情報。　26:hawki「英雄叙事詩」。tunpu あるいは tumpu は北海道で「部屋」【方言辞典】。moro「室、穴居、住居」【バチラー】。

アイヌ語の注釈に関する引用文献と略称

萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂：【萱野】

金田一京助（編）（1980）「附録樺太アイヌ語彙」山辺安之助（著）『あいぬ物語』（アイヌ史資料集 6　樺太編所収）北海道出版企画センター：【あいぬ物語】

田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館：【沙流】

知里真志保（1976）『分類アイヌ語辞典　植物篇』（知里眞志保著作集）平凡社：【植物篇】

知里真志保（1976）『分類アイヌ語辞典　動物篇』（知里眞志保著作集）平凡社：【動物篇】

知里真志保（1975）『分類アイヌ語辞典　人間篇』（知里眞志保著作集）平凡社：【人間篇】
中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館：【千歳】
ジョン・バチラー（1981）『アイヌ・英・和辞典』第 4 版、岩波書店：【バチラー】
服部四郎（編）（1981）『アイヌ語方言辞典』岩波書店：【方言辞典】

参考文献

浦田遊（編）（1998）『アイヌ・モシリ―幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会
小川運平（1923）『日本と大陸』北駸学会
近藤守重（1905）「辺要分界図考」『近藤正齋全集』第一、国書刊行会
多田ヨネ（口述）、田村将人（訳注）（1999）「アイヌ文化調査ノート①新問地方」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 2 号
田村将人（2007）「白浜における集住政策の意図と樺太アイヌの反応」『北海道開拓記念館研究紀要』第 35 号
チカップ美恵子（編著）（2005）『森と大地の言い伝え』北海道新聞社
松浦武四郎、高倉新一郎（解読）（1978）『竹四郎廻浦日記　上』北海道出版企画センター
松浦武四郎、秋葉實（翻刻・編）（1999）『校訂蝦夷日誌　二編』北海道出版企画センター
松本成美（編）（2005）『久摺』特集号、釧路アイヌ文化懇話会
間宮林蔵（述）、村上貞助（編）、洞富雄、谷澤尚一（編注）（1988）『東韃地方紀行他』（東洋文庫 484）平凡社
矢島睿（1993）「蝦夷錦の名称と形態について」『1992 年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』北海道開拓記念館

Vocabulary of the Sakhalin Dialect of Ainu and Oral-History in the Note by Tasuke YAMAMOTO

Masato TAMURA
(Historical Museum of Hokkaido)

Tasuke YAMAMOTO (1904-1993), a Hokkaido Ainu man who was born in Kushiro, made a trip to two Sakhalin Ainu's villages (Niitoi and Shirahama) in 1936-1937. He then recorded vocabulary of the Sakhalin dialect of Ainu and oral-history about chiefs.

His notes were donated to the Municipal Library of Kushiro in Hokkaido.